

国際交流基金後期中等教育用 日本語教材制作について

向井 園子（国際交流基金日本語国際センター）

坪山由美子（同上）

浜田 麻里（同上）

キーワード：教材制作、中等教育、コミュニケーション活動、話題

要旨：海外の中等教育レベルの日本語学習者の急激な増加に伴い、教師養成とともに教材開発の必要が叫ばれている。この状況に鑑み、国際交流基金日本語国際センターでは、非漢字圏の後期中等教育向けの教科書を作成することとなった。以下に、現在作成中である教材の概要と特色について述べる。

I 制作の背景

海外における日本語教育は、急速な伸びを示している。しかも、学習者はかつてのように大学などで日本研究を専攻する学生に限らず、教育機関や学習目的も多様化してきている。特に顕著な変化の一つとして挙げられるのが、韓国、中国、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランド、米国の初等・中等教育機関で正規の教科として日本語が導入されるようになってきたことである。海外の初等・中等教育機関における日本語学習者は、全学習者の67%にのぼっているのであるが⁽¹⁾、この教育段階の学習者の急激な増加に伴い、日本語を教えることのできる教職員の育成、カリキュラムの整備とともに、適切な教科書・教材の開発および確保が急務となってきていると言われている⁽²⁾。日本国内で開発された教材で、海外でも使用されている教材は少なくないが、中等教育レベル向けに開発され、海外でも入手可能な教材は非常に限られている。更に、入門用の教科書の数が増えてきている中で、国内、海外を問わず、中等教育レベルで一貫した使用に耐え、中級への移行を可能にし、しかも、最近の現代語教育でもとめられているコミュニケーションを重視した教授法（アプローチ）に沿った教材となると、一般の入手が難しいのが現状である。国際交流基金日本語国際センターでは、以前からそのような問題点の解決の一助となるべく中等教育の教師向け研修、情報交流などを行ってきたが、上記のような中等教育レベルにおける日本語教育の状況に鑑み、後期中等教育機関の学習者を対象とした主教材を開発すること

となったのである。

Ⅱ 教材の概要

1. 対象

非漢字圏の後期中等教育機関において日本語を学習する者とする。漢字圏と非漢字圏とでは教育現場のニーズにかなり違いがあると考えられるため、教材の整備が急務となっている非漢字圏に限ることとした。海外中等教育レベルの学習者の特性として、学習目的がはっきりしない、動機付けが弱いということ、学習環境としては、日本語がすぐ実生活に結びつかないこと、また、教師の日本語運用力および日本、日本文化に関する知識も限られている場合が想定されている。

2. 予想学習時間

入門から400時間程度とする。本教材制作のために海外で行った調査によると中等教育レベルにおける学習時間は、かなりばらつきがあるものの、過半数が年間50～150時間の範囲であり、学習年数では2～5年の開きがある^(*)。この状況を考慮して、本教材では、年間100時間程度で4年間学習する場合を想定している。

3. 学習目標

日本または日本語を使用する環境において、日本語を介して情報の授受、意思の疎通をはかり、日常の基本的な要請に対処するための基礎的な日本語運用力を養うとともに、継続的な学習を可能にする日本語の基礎知識を養うことを目標とする。ここでの基礎知識として文法、語彙、表記に関しては、日本語能力試験3級程度とする。中級への移行を可能にするためにはこの程度の学習が望ましいと考えられるだけでなく、各種の中等レベル向けの教材やシラバス、カリキュラムなどからも、中等教育レベルでの初級400時間程度の学習時間の場合、これが妥当であると考えられるからである。

4. 全体構成

本冊、ワークブック、教師用マニュアル、音声テープからなる。本冊は、4分冊に分割され、それに準じてワークブック等も構成される。

5. 使用言語

日本語と英語とするが、「各国語版」を出すことも考慮中である。

6. 制作

編集：国際交流基金

監修：大坪一夫

執筆：向井園子、小林典子、酒井たか子、坪山由美子、浜田麻里

Ⅲ 教材の特色

以下に述べる4つの考え方が本教材の基盤をなしている。

1. コミュニケーション活動の重視

課（ユニット）ごとに、話題（テーマ）にそった実生活上あるいは教室内のコミュニケーション活動を到達目標として立て、その達成のために学習過程においても、目標言語を使用してある課題を達成するタスクなどの学習活動を積極的に取り込むことによって、学習の場である教室において目標言語を使用してコミュニケーションが行えるよう配慮している。このようなアプローチをとる根拠は、コミュニケーションの手段としての日本語学習が中等教育レベルでも重視されてきていることが、上記の調査⁽⁴⁾、および海外のシラバスなどからも読みとれるからである。

2. 話題立て、コミュニケーション活動を土台としたシラバスを採用

文法、機能、語彙（概念）を主な柱とし、話題により課（ユニット）を括ったシラバスを採用。主な話題としては、「学校生活」「余暇」「体と健康」「食事」「町・交通・旅行」「仕事」などを取り上げる。話題立ての方式を採用した主な理由としては、言語を文脈（CONTEXT）の中で提示するのに最適であること、また海外のシラバスの多くが話題立てであることが挙げられる。シラバスの組み方としては、文法、機能、語彙の各個別シラバスの項目をその課の「話題」の中で、目標となるコミュニケーション活動を土台としてすり合わせ、組み入れる方法をとっている。（資料1、2参照）

3. 繰り返しながら徐々にレベルを上げる

中等教育レベルの日本語教育は大学などと比べ、非集中的であり、また、学習

の効率も高くないといえよう。このような学習者のためには一度に学習する項目を少なくし、しかも、繰り返しながら徐々にレベルを上げることが望ましいと考える。具体的には、同じ話題が異なったレベルで繰り返し出され、レベルごとにより高度な内容となる。同様に、その話題の中のコミュニケーション活動が繰り返されながらより複雑なものになっていくのに伴って、機能も、同じものが上のレベルでより高度な表現形式をとって繰り返され、文法項目や語彙などが、異なった話題（課）の中、あるいは異なったレベルで、繰り返し出されながら定着が進むことが意図されている。

レベル1の7つの課のうち、第4課「食事」で提示されている文法項目を例にとって説明してみる。この課では、例えば「食事を注文する」「食べ物の好き嫌いをきく」などのコミュニケーション活動が目標として掲げられている。そして、その目標のもと形容詞の否定形が導入されている。「甘くない」「おしくない」といった語彙が選択され、文脈の中で提示されている。形容詞の導入は、第2課「学校生活」でその肯定形が「数学はむずかしいです。」などの文脈で、その過去の形が第7課「余暇」で「映画はおもしろかったです。」などの文脈で扱われている。つまり、コミュニケーション活動を土台とすることによって、言語項目をより自然な文脈で提示することを可能にし、また、ひとつの教材の中で繰り返し同じ言語項目が取り上げられる過程で、徐々に複雑な形式が導入されていくことになる。

4. 「日本語学習」とともに、「日本文化理解」、「学習方法の学習」を目指す
「日本文化理解」、「学習方法の学習」は、日本語の効果的な学習に必要なのみでなく、学校教育の一環としての外国語教育という観点からも含めることが望ましいと考えるからである。

まず、「日本文化理解」に関してであるが、近年、外国語教科書において文化を扱うことは、重要な要素となっている。外国語学習において言語を学ぶことのみが最終目標になるのではなく、言語学習を通してその言語を使用している国の文化を学ぶことが重要な課題となっている。言語運用はそれを話す人々の生活、習慣、文化などと密接に関わり、その正しい理解の上にはじめて正しい言語運用ができるようになるという事実からももっともな課題である。本教材では、日本人の考え方や行動、その社会を各課の話題、コミュニケーション活動等に関連させて提示していくことにより「日本文化」に接する機会を提供しているだけでなく、中等レベルでの日本語教育が学校教育の一環としての外国語教育であるという見地から、異なる地域や国の持つ考え方などを尊重できる開かれた態度を養うことも大切であると考え、その点に配慮する。本教材で扱う「文化」は、課（ユニット）の内容によって、イラスト・写真（例えば、町の風景など）、言

語表現（例えば、食事のあいさつなど）、英文による説明（例えば、日本の教育システムなど）さまざまな形式をとって提示される。

「学習方法の学習」に関しては、学習者個々のスタイルを活かしつつ、効果的に言語学習をすすめるための方法を指導する。これにより、学習者の自律を促し、今後の学習においてもプラスの働きをすることが期待される。本教材では、先行研究を参照しながら、学習者が身につけるべき知識や技術を整理し、

(1) 言語学習に限らず学習一般に適用できるような「学習に関する」もの

学習者としての自分自身の特性を知っているということ

学習のプロセスを知っているということ

}	計画
	練習
	モニター・評価

(2) 言語に特有な「言語情報の処理に関わる」もの

情報の選択

情報の分析

記憶

推測

に大別して、各レベルでこれらすべてのストラテジーをカバーするよう1課（ユニット）にひとつずつ取り入れる。学習者の意識を高めるためには、学習方法の学習のために独立した活動を行うのではなく、通常の学習活動の中に組み込んでいくことが望ましいと思われる。本教材では、言語に対する意識を高めたり学習過程を振り返ったりするための種々の活動を言語学習活動の中に組み込んでいる。

注

1. このデータは、「海外日本語教育の現状」国際交流基金日本語国際センター(1990)による。
2. 「第2回国際懇談会のための報告書」国際交流基金日本語国際センター(1990)による。
3. 坪山由美子、向井園子「海外の中等教育機関における日本語教育の現状と教材制作への方向性」『日本語国際センター紀要』第4号(1994)参照。
4. 同上

主な参考文献

〔シラバス、ガイドラインなど〕

- “Australian Language Levels Guidelines” Curriculum Development Centre(1988).
- “Foreign Language Program of Studies” Division of Academic Skills, Montgomery County Public Schools (1990).
- “A Framework for Introductory Japanese—Language Curricula in American High Schools and Colleges”, National Foreign language Center, Washington, DC(1993).
- “Japanese as a Second Language Program of Studies” Alberta Education Canada(1993).
- “Japanese Curriculum Guide, Intermediate Program (First four years)” Ministry of Education and Ministry Responsible for Multiculturalism and Human Rights, British Columbia, Canada (1992).
- “Japanese Syllabus” Levels 1, 2&3, Department of Education, Wellington, New Zealand(1986).
- “Junior Syllabus In Japanese” Board of Secondary School Studies, Queensland, Australia (1988).
- National Curriculum Guidelines for Japanese (Western Australia and Queensland)(1993), YOROSIKU SERIES/ もしもし, Curriculum Corporation.
- “Senior Japanese” Board of Secondary School Studies, Queensland, Australia(1987).

〔その他参考文献〕

- 岡崎敏雄・岡崎眸(1990)『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社
- 坪山由美子・向井園子(1994)「海外の中等教育機関における日本語教育の現状と教材教材制作への方向性」『日本語国際センター紀要』第4号
- 日本語教育学会編(1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
- ジョージ P. マーフォク他編 (1988) 『文化項目分類』 国立民族学博物館
- Clark, John L. (1987) Curriculum Renewal in Schools Foreign Language Learning, Oxford University Press.
- Johnson, Robert Keith (1989) THE SECOND LANGUAGE CURRICULUM, Cambridge University Press.

- Nunan, David (1988) THE LEARNER-CENTRED CURRICULUM, Cambridge University Press.
- Nunan, David (1989) DESIGNING TASKS FOR THE COMMUNICATIVE CLASSROOM, Cambridge University Press.
- Omaggio, Alice (1986) TEACHING LANGUAGE IN CONTEXT, Heinle and Heinle.
- Richards, Jack C. (1990) THE LANGUAGE TEACHING MATRIX, Cambridge University Press.
- Wenden, Anita (1991) LEARNER STRATEGIES FOR LEARNER AUTONOMY, Prentice Hall.
- Yalden, Janice (1987) PRINCIPLES OF COURSE DESIGN FOR LANGUAGE TEACHING, Cambridge University Press.

話題 (テーマ) 別シラバス (レベル 1)

話題 テーマ	食事・食べ物	言語活動 目標	食べ物を相談して決める 食べ物の行き先をきく 注文を決める。	食べ物を注文する 食事のあいさつをする 味についてコメントする	過去のことについてコメントする		
機能	場面	概念	語彙	表現	表記	非言語表現	
<ul style="list-style-type: none"> ・好みを伝える／尋ねる ・意向を伝える／尋ねる ・理由を伝える／尋ねる ・意見、感想を伝える／尋ねる ・決断を伝える ・希望を尋ねる ・依頼する ・提案する ・依頼／提案を受理する ・提案を断る ・いじごいじをする ・安心を表す ・不快を表す ・驚きを表す 	保健室での健康相談	食べ物	魚／貝／卵 肉／肉類／野菜／果物／豆類／穀類 牛乳／ヨーグルト／チーズ／バター／クリーム 調味料／油／酢／ソース／ケチャップ／マヨネーズ 飲み物 水／牛乳	～はどうですか いいですね／～はちょっと そうです よかったです！／え！ いただきます ごちそうさま(でした) いらっしゃいませ ～をお願ひします はい、かしこまりました ご注文ですか はい、少々お待ちください ～をください			
	デパートの食堂で食事をする	飲み物	コーヒー／ジュース／お茶／水 /牛乳	文法／句型 ～は～が 好き／嫌い です ～は～が 好き／嫌い じゃありません Nを [数] (ください) Nにします (か) Vましょう ～が…… AですかBですか どんなN Vました/Vませんでした [い・adj] (ないです) は (～を、が)	会話運用のスト フページ	文 化 ・日本の食べ物 ・食事のときのあいさつ ・食べ物屋 (レストラン、喫茶店) ・食料品店 ・日本人の食生活	
	ホストファミリー以外の日本人家庭で食事をする	行ふ	行ふ	好き／嫌い／どう			
	味	味	あまい／からい／おもしろい／しお からい あつい／つめたい				
		程度	少し／あまり／とても				
		時	きょう／きのう				
		人	～君				
		言語	日本語				
		数	ひとつ～とび、ちいさ、おおき				
					学習方法の学習 ・評価する ・課の最初にした計画に基づいて自分の到達度を評価する	人間関係のロール 留学生と医者 留学生と日本人高校生 留学生と保健室の先生 日本人の知り合い同士 (成人) 若くウエイトレス	

話題 (テーマ) 案

	話題 (テーマ)	レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4
1	自分・他の人々	○	○	—	—
2	日常生活・家庭	○	○	○	—
3	学校生活	○	○	○	—
4	食事	○	○	○	—
5	買い物	○	○	○	—
6	余暇	○	○	○	—
7	町・交通	○	○	○	—
8	体・健康	—	○	○	—
9	仕事	—	—	○	—
10	旅行・観光	—	—	—	○
11	日本の社会制度	—	—	—	○
12	日本人の生活	—	—	—	○
13	文学	—	—	—	○
14	科学・技術	—	—	—	○
15	社会問題・メディア	—	—	—	○
16	自然・環境	—	—	—	○
17	日本と世界	—	—	—	○